

東南アジア島嶼部における「小国」の 存在形態に関するノート

坪 内 良 博*

A Note on the Character of the Petty States in Insular Southeast Asia

Yoshihiro TSUBOUCHI*

This article is a supplement to the same author's previous paper on the population and character of traditional communities in Southeast Asia. Except in Java and some other localities, the populations in this area were, until the last years of the 19th century, characterized by their sparsity, diversity, smallness, and mutual independence. Despite their substantial political independence, these petty states often recognized the authority of an externally located Center. The nature of this spiritual dependence was clearly distinct from sub-

ordination to a physical power, and leaders often obtained legitimacy through blood or titles recognized or granted by the Center. The petty states in Negeri Sembilan provide a good model, which may be applicable to other, bigger states of the area.

Some recent schemes for understanding the traditional Southeast Asian polities, including Milner's *kerajaan*, Wolter's overlapping mandalas, and Geertz's theatre state are also reviewed in reference to the author's scheme.

I はじめに

この小論は拙稿「東南アジアにおける人口と伝統的基礎社会の性格——島嶼部を中心として——」[坪内 1983]における論述の補足を試みるものである。ジャワ島・バリ島およびスマトラのミナンカバウ地域などを除く、東南アジア島嶼部における人口は、とくに19世紀後半に至るまで、その希薄性を背景に、人口クラスターの多様性と各クラスターの小規模性を特徴としていた。この状況の下に、村落連合に過ぎぬ小単位が、あたかも「国

家」のごとき独立性を主張し維持してきた。本稿では、これらの小国がいかなる意味において独立していたか、またいかなる意味において他に従属していたかを論じ、あわせて全体像の把握を試みる。従属に関してここで重視したいのは、その経済的側面ではなく、精神的側面である。前者は強制による税あるいは貢納のとりたて、賦役、軍事的動員などにおいて顕現化し、通常の権力観における支配・被支配の枠組から容易に捉えられる。これに対して後者は、とくに歴史学における支配において比較的軽視されてきた側面であって、その純粋な形態は、名目的な服属をともなう財の交換あるいは贈与の関係という中間的な形態を越えて、純粋に威信体系、すなわ

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

ち権威の認知そのもののみから成立している。過去を扱う資料（史料）の中から、この要素にかかわる現実を組み立てることはきわめて困難であるが、断片的な事実からそのメカニズムを想定する作業は無意味ではないであろう。イデアルタイプの構築は非歴史的であるがゆえに、この種の作業が現実から遊離していく可能性があるとしても、それは少なくともある種のとらわれからの解放への一つの手がかりになるかもしれない。

本稿における考察の理論的主題は、いい古された用語法における中心と周辺 [Shils 1975] にかかわっている。意味の世界において中心と周辺をつなぐメディアというまでもなくシンボルであるが、中心ではことばそのものの充実の意味づけを含みつつ、このシンボルをめぐってあらゆる側面における統合と体系化が実現されるのに対して、周辺ではシンボル自体がより凝縮されて短い形式で伝えられ、その保有する観念の内容は各地方の（すなわち周辺部それぞれの）ことばで説明される。本稿の考察内容との関連においては、中心的価値を運ぶメディアとして、血筋 (keturunan) あるいはそれから派生するさまざまなタイトルがあげられる。

II 断片的事実

島嶼部における小国 (petty state) の典型としてしばしば言及されるのは、マレー半島のヌグリスンビラン (Negeri Sembilan) におけるミナンカバウ系の小国家群である。ここでは、18～19世紀におけるこれらの国々を念頭におきつつ、モデルをつくってみたい。この時期のヌグリスンビランが特殊な状況下にあることを強調するならば、この種のモデルは適用性を著しく限定されることになる。実際この地域は、他のマレー系の国家域とは異なって、より閉鎖された内陸部に位置してお

り、このような地理的特殊性とミナンカバウの親族組織とが相乗的に作用して、出自起源に関する強調性が維持されると同時に、それぞれの自治的組織の規模が小さいままに保たれていた。しかしながら、この小規模性自体は、島嶼部マレー国家群の全般的な小規模性の中での相対的な問題に過ぎず、小規模性のゆえに政治関係における特性がむしろモデル化され易く、より明瞭に現われてくるとみなすこともできる。

18, 9世紀が特殊な時代であるということも、考慮すべき条件の一つである。東南アジア島嶼部においては、人口増加、開発にともない、近隣地域との間で衝突・摩擦が次第に顕著になりはじめ、また土着の大勢力がイギリス、オランダなどによって牽制を受ける状態になっていた。かくして、一方では小政治単位の独立性がむしろ顕現化し、他方では外部との関係を余儀なくされる状況が形成されていた。われわれの視点からすれば、モデル化のための理想的な状況が展開しているとさえいえる。¹⁾

英保護領化前後のヌグリスンビラン諸国に関しては、イギリス人官吏、旅行家、研究者などによる記述が多く残されており、また土

1) Andaya [1979: 10] の指摘するように、マレー世界（あるいはより狭くマレー半島）における土着国家の政治的構造は、Gullick [1958] の分節的なモデルを疑問視させるほど多様であり、各国 (each *negeri*) が独自性を示したことも無視できない。スマトラ、セレベス、ボルネオなどを加えてさらに広域に観察した場合、多様性の存在はより強調されるかもしれない。しかしながら、広域の観察は共通性の抽出にも役だつのであり、個別事象に埋没しない視点を獲得するために重要な役割を果たす。Swettenham [1880], Raffles [1879] などにはこの観点にたつ記述がみられる。植民地化直前期のマレー3州に関するGullickの記述はそれ以前の世紀には必ずしもあてはまらないとする、Andayaの歴史学者としての見解も、正論として受容されると同時に、原理の抽出という観点からすれば強調され過ぎてはならぬ側面を有する。

着の考え方も慣習法として結晶化された形で採録されている。以下、これらを利用しながら簡述する。²⁾ これらの諸国の起源に関しては諸説があるが、元来土着の原住民が形成していたむらに、ミナンカバウ系を主とする移住開拓民が加わったものと解するのが妥当であろう。これらの諸小国は15世紀ごろまでに伝説上の存在を開始するが、有名な母系制の慣習法を完全にとり入れたのはかなりののちのことであり、ミナンカバウ系移民の少ないスンガイウジョン (Sungai Ujong) に関しては19世紀のことといわれる。Newbold [1839] による各小国の推定人口は、Rumbowe 9,000, Srimenanti 8,000, Sungie-ujong 3,600, Johole 3,080, Jampole 2,000, Jellabu 2,000 (地名は原綴のまま) であった。³⁾

これらの小国は共通の宗主としてジョーホルのスルタンを仰ぎ、その認知を受け、印章とタイトルを付与されるのであるが、⁴⁾ 元来

これらが一体となって連合を形成したのではなく、ジョーホルのスルタンによる認知や印章の授与もばらばらの時期に行われている。⁵⁾ スルタンからはヌグリの首長以外にもタイトルが与えられていることがある。⁶⁾ このことは認知自体が「国」としてのヌグリの長にあてられたものではないことを示唆し、スルタンが「国」をつくったわけではなく、土着の地域単位としての小国の首長がたまたまスルタンの権威に直結する構造を有していたということの意味する。ジョーホルのスルタンは上記の行為を行い、また各首長が年1回彼の下に伺候することを期待したにもかかわらず、これらの小国 (独立村) に対して実際の権力を行使することはできず、それぞれの小国 (negeri) の首長プングル (penghulu) は独自の統治権を有していた。すべてのヌグりがひとりの首長によって完全に統括されているわけではなく、例えばスンガイウジョンは独立性の高い下位の首長を数人有していたという。

このような状況において導入されるのが、名目的な統一首長、Yang Di Pertuan Besar (古い時期の英語文献では Yamtuan Besar, Iang de Pertuan Besar などとも書かれている) で、当時ジョーホルのスルタンとヌグリスンビランの小国との間に介在し、オランダ勢力に擁立されつつヌグリスンビランを支配していたブギス人 Dyen Cambodia の統治法を嫌って、ルンバウ (Rembau), スンガイウ

2) 本稿では主として下記の資料を利用した。

Begbie [1834], Birch [1906], Bland [1895], Braddell [1856], Caldecott [1918], Hervey [1884], Lister [1887; 1890], Newbold [1837b; 1837c; 1839], O'Brien [1884], Parr & Mackray [1910], Wilkinson [1921; 1971], Winstedt & de Jong [1954]. これらの間には当然互いに矛盾する記述があり、その選択手続きが示されねばならないが、本稿のもつ序論的性格にともなう記述の簡潔化のために、その煩瑣性を避けることにした。

3) Negeri Sembilan は九つのヌグリ (negeri, 国または村を意味する) の意であるが、九つの negeri がどこを指すかについては見解の不一致があり、また実際に九つが対等の地位をもって示されることはほとんどない。

4) Newbold [1839: II, 78] によると、ジョーホルのスルタンから与えられたとされる首長のタイトルは、以下のごとくである (原綴のまま)。Orang Kaya Muda (Segamet), Johan Lelan Percasseh (Johole), Maharaja Lelah (Naning), Klana Rutra (Sungie-ujong), Akhir Zeman (Jellabu), Lelah Maharajah (Rumbowe), Tuanku Calang (Calang or Selangor), Raja Anda Segara (Ulu Pahang including Seriting and Jampole), Maharaja Purba (Jellye)。

5) 例えば、Rembau の首長の場合1707年, Sungai Ujong の Dato' Bandar の場合1715年, Jebeu の首長の場合1759年ごろ, Johol の首長の場合1778年に、印章の授与が行われている [Wilkinson 1921]。

6) 例えば、Rembau における出自集団の長のひとりには Sedia Raja (Beduanda Jawa の長), 他の出自集団の長には Lela Maharaja (Beduanda Jakun の長) のタイトルが与えられている。Rembau 全体の長は後者であった (タイトル名原綴のまま) [Hervey 1884]。

ジョン、ジョホル (Johole), およびスリムナンティ (Srimenanti) のプングルたちが相談して故国ミナンカバウから招聘したといわれる。最初の招聘王 Raja Melewar はミナンカバウのスルタンの子であり、1773年に派遣されたという。⁷⁾

重要なことは、ミナンカバウから派遣されてきた統一首長は、実質的にはほとんど支配力をもたず、また後継者の選択権をもたなかったということである。彼は所領もなく、住民に対する課税権をもたない。⁸⁾ 彼が有するのは名目上の威信と小さな宮殿、そしてときには系図を含むレガリアのみである。彼は前述の四つの小国の各住民から、1戸あたり1年に米1ガンタン、ココナツ2個、および1スクを受けとって生活し、家族の割礼、婚礼、および葬礼に際して各プングルは、水牛3頭と相応の物品とを贈るように定められていた [Newbold 1837b: 256]。⁹⁾ Raja Melewar の死亡後、Raja Adil, Raja Itam, Lingang Laut らがミナンカバウから派遣されてくるのである。われわれはここで血統に対する価値付与と、それが物質的支配に結びつかぬこととを重視したい。¹⁰⁾

マレー人が権力の実質的内容に満足せず、

- 7) ミナンカバウの王子の渡来に関しては、よりはやい時期にそれが継続的に行われたという伝説がある。1722年のマラッカのオランダ側記録も、その事実を裏づけるという [Wilkinson 1971: 295]。
- 8) Rembau の慣習法には次のごとく記されている。“Adapun Raja itu tiada mempunyai negri dan tiada boleh menchukei kharajat...” [Hervey 1884]。
- 9) ガンタン (gantang) は容量単位であり、地方によって異なるが、1ガンタンの米は約5カティ (kati, 3 kg 強) とされる。また、1スク (suku) は13½セントという記述がある (ただし1884年)。
- 10) Sungai Ujong の慣習法では小国 (negeri) 間の紛争を解決する役割が、統一首長に期待されている。しかし、negeri の自律性自体は高いのである。

タイトルそのものを渴望すること、また、ヌグリスンビランほどタイトルを欲しが国は世界中どこにも存在しないことに関しては、Wilkinson [1971: 297, 304] の述べるところである。より大きな勢力と小さな勢力との関係は、この場合、前者につながる者を実質的な権力をともなわぬ形で後者の世界にとりこむこと、換言すれば、財の収奪を最小限に保ちつつ、タイトル付与などによる上下関係を樹立することによって、精神的世界あるいは情報の領域において階統的構造化が行われた状態とみなすことができる。「白い血」の観念を含む血統の原理ないし貴種尊重の原理が、タイトル保有、あるいはタイトル付与にかかわる正統性に強く結びついていることにも留意しておきたい。¹¹⁾ 中心と周辺とがこのような文化的認知のみによって結ばれているという形式での相互連携の形——それは必ずしも一つの中心の下に単一化されていない場合もあり得る——を描くことが可能である。われわれはここに組織化未完了の国家像を描くというよりは、観念のみによる権威の広がりをもつ世界を描き出すことができる。¹²⁾

一つの小国が大勢力に従属する形については、貢納ないし税の実質的意義が検討されねばならない。ここでナニン (Naning) に眼をむけよう。¹³⁾ ナニンは前述のヌグリスンビランの小国の一つであり、1834年ごろの総人口は約6,000人 (1,500戸) で、小は2戸、大は216戸からなる30余の集落に分かれていた。

- 11) タイトルを与える権限を有する上位者を欠く状態が生じたときには、タイトルの僭称ないし上位タイトルの勝手な使用が行われることは自然である [Braddell 1856]。
- 12) これらの秩序下にある首長たちが、文字通り秩序の人であるという仮定は、全く必要がない。大小の首長の地位は常に安泰なものではなく、とくに同一ランクの血統保持者によっておびやかされている。
- 13) Naning に関する記述は、Begbie [1834], Newbold [1839], Braddell [1856] などによる。

他のミナンカバウ系の小国と同様、ジョホールに対する貢納の程度は不明であるが、マラッカのオランダ政府に対しては、もみ米 400 ガンタン、鶏 6 ダース、水牛数頭を納めるほか、川を下る舟 1 隻につき 45 ½ セントの税金を支払っていた。1746年には住民が困窮しているという理由で、上述のもみ米貢納は半量の 200 ガンタンに引き下げられ、この状態は 1776 年まで続いた。¹⁴⁾ オランダの支配がジョホールのスルタンの支配形態をそのまま引き継いだものであったかどうかに関しては議論の余地があるが、この状態はイギリス人の眼に奇異なものとして映っている。オランダからナニンを含むマラッカを譲渡されたイギリス人は、このような少量の貢納によっても、ナニンの首長や住民が「支配下にあることを認めている」という側面を彼ら流に解釈するのであって、やがてはオランダとの条約をたてに、海峡植民地マラッカと同様の統治権力をナニンにも適用し、彼らが 10 分の 1 税と考えたものを本来の形に戻すことを要求してナニン戦争 (1831~1832) の一因をつくるのである。

マレー世界において 10 分の 1 税が一般的に行われていたという見方 [Maxwell 1884] はヒンズーの支配者の特質をうのみにしたもので、ヌグリスンビランのラジャ (raja) に与えられた地位と権力にはあてはまらないものである [Parr & Mackray 1910]。マレー世界一般においても、10 分の 1 税が完全に実施されていたという想定は無理なように思われ

る。¹⁵⁾

四つの氏族 (suku) を含んで村落国家 (negeri) を形成し、その連合体の象徴あるいは調停者として Yang Di Pertuan Besar をいただくという構造は、他のマレー世界におけるスルタンの求心性に比してあまりにも分権的であるとしても、他のマレー世界にも類似の状況を見出すことは容易である。

ミナンカバウに並ぶマレー世界の有力種族ブギス族が、「白い血」の血統と系譜を重んずることはよく知られている。時代はかなりさかのぼるが、この世界においても客人王として招かれた者の話が伝わっている [Zainal Abidin 1983]。このブギス世界の一員であるボネ王国は八つの小国 (petty states) の連合体であり、この連合体の首長の決定権は著しく限定されていた。彼は小国の小首長 (arung) たちに依存するところが大きく、財政も和戦の決定も小首長たちの合議によってなされたという [Crawford 1820: III, 11-12]。

スマトラ南端のランボンの村落に関しては早期から続いた独立性が指摘されており、これらの小首長たちが、自村で栽培されたコシウを貢納というよりは一種の対価として、バンテン王国などからのタイトルを望んだこともよく知られている [Zollinger 1851: 71]。

同じランボン系の種族が、ジャワ島からはさらに遠い南スマトラのコムリン川 (ムシ川の支流) 沿いの村落ブンガマヤンに、次のような伝説を残している。ブンガマヤンは、現在のランボン州内の山間盆地にあったとされるスカラブラックを発祥の地とする人々が、コムリン川沿いに下ってきて開拓村をひらいたことにより成立した。3 人の兄弟が三つの集落ドゥスン (dusun) をつくったが、ジャワ島のマタラム王国の認可を得たランバワンのラジャマスが三つのドゥスンの首長になったという (筆者自身のききとりによる [坪内

14) 1827 年 7 月のイギリス人官吏の報告によれば、Naning におけるもみ米の生産量は 1,125,000 ガンタンとされる [Braddell 1856: 201]。この量は戸数を 1,500 戸とした場合、1 戸平均 750 ガンタン程度の見積りである。200 ガンタンはこの総量の 5,625 分の 1 に過ぎないのである。

15) 独立的な村落に税の支払いを要求することは当然行われた。Perak の Kurau 地方では、1 戸あたり 30 ガンタンの貢納要求を拒否したために遠征をこうむり、70 ガンタンを納めるようになったという記録がある [Denison 1886]。

1979]。)。タイトルを得たものが首長となったという表現が示唆的である。

マレー半島海岸部の諸土侯国は人口規模がヌグリスンビランの各小国よりも大きく、これらの小国中最大のルンバウの1.3倍から6倍の人口を保有していたが、絶対値としてみる限りにおいては、これらもまた決して大きいものではない。¹⁶⁾ ヌグリスンビランの小国の首長に比して、土侯国の下位首長たちのスルタンへの求心性は高いとはいえ、GullickやAndayaが少しずつ異なったニュアンスで指摘するように、地方首長たちの権限がかなり大きかったという側面は見落されてはならない。スルタンへの求心性はマレー社会における階級区分構造(Gullickのいうhorizontal division)を背景に、下位首長に対するスルトンの称号付与機能を中心に出現したものと解される側面がある[Gullick 1958: 48, 75]。

小国の独立性という観点からすれば、視点を一段上昇させて、スルタン支配下の土侯国それ自体が一つの小国であるという相対的な見方も可能となる。大抵の場合5万人以下という人口規模からすれば、これらもまた小規模単位であることには変りはない。かくのごとき視点から、シャム王に対するケダーのスルトンの位置、ジョホール王に対するパハン王の位置などが独立と従属との間で捉えられ、周辺からの見解をとれば独立という側面が強調される事実が重視されねばならないのである。

16) Newbold [1837a] による推定人口は、ケダー25,000, ペラク35,000, スランゴール12,000, ジョホール25,000, パハン40,000, トレンガヌ30,000, クランタン50,000, パタニ54,000である。同時期の海峡植民地の人口は、ペナン40,032, プロビンス・ウェルズレイ49,553(いずれも1833年), シンガポール26,392(1834年), マラッカ34,333(1833/34年)で、土侯国に匹敵する規模を有していた。Newbold [1839]にも同様の数値が記されているが、ケダーおよびリゴール50,000, パタニ10,000などとする修正が加えられている。政治的情勢の変化に対応するものであろう。

III 政治的単位の関係のあり方をめぐって

東南アジア地域における伝統的國家のイメージをめぐって、新しい傾向を示す書物が出版されている。ここで、そのいくつかをとりあげて、上述の議論との接合点および不連続点を指摘しておきたい。

A.C. Milner は、マレー半島のパハンと、スマトラ東海岸のデリをとりあげて、実権が地方の小首長にあったとする Gullick に対し、「精神的報酬の最大化」(maximization of spiritual rewards)の観点から、行為の質に由来する支配者の「名声」(nama)と、それを慕う家来・同調者との関係からスルタンへの求心性を説明しようとする[Milner 1982]。当時のパハンの政治的危機的状况を背景にしたスルトンの個人的資質の重要性、および小国家創成にともなうデリの支配者の個人的資質が、namaにかかわっているものであって、namaの役割の重要性の指摘がユニークな理論構成の核となっている。しかしながら、個人的資質としてのnamaの重視は、これを伝統的制度の中に位置づけるためにはいくつかの弱点を有することを指摘しておかねばならない。すなわち、namaは支配者あるいは指導者に必要とされる属性の一つであって、とくにその個人によって後天的に獲得された行為パターンだけで正統性が獲得されるわけではない。現実の貴種との血縁を欠く場合に、いかにして系譜を操作するかが、もう一つの必要条件となっているように思われること、血統正しく権威ある支配者がnamaを失うべき行為をしたとしても、その権威は必ずしも消滅しないことなどは、個人的能力に関係なく賦与された資質の存在を認めねばならぬことを意味し、マレー世界における権威の源泉を対人関係や行為を越えたところに求めねばならぬことを示唆している。とり巻き連

(entourage) を越えて精神的支配を維持するための機構は別に求めた方がよく, nama はそれを活性化するために重要な働きをすると考えることができる。

O.W. Wolters は, “men of prowess” あるいは “big men” という考え方を東南アジア史の統合的理解のために導入することによって, 上記の見方に共通する基本的視点を提供している。彼の枠組はこれらの複数の中心が重なり合う状況として東南アジア世界を把握しようとするものであって, “overlapping mandalas” あるいは “circles of kings” という語でそれを表現している [Wolters 1982: 6, 16]。これは, 大国家あるいは大中心をさらに越えた位置から俯瞰した形として, 東南アジア像を描くためにきわめて魅力的な図式である。この重なり合うマンダラの中で, 小国家をいかに位置づけるかということがわれわれの関心となるが, 所属の多重性および可変性と同時に, 比較的小さな単位もそれ自体として中心性を主張している形を想定する必要がある。

C. Geertz はバリ島の小国タバナン (Tabanan) を舞台として, この小単位がそれ自体の中心をもつ完結した小宇宙として存在する姿を, 王と宮殿と儀式に焦点を合わせつつユニークに描写している [Geertz 1980]。そこではミメシス (mimesis) の概念を用いながらも, その求心性の強調のために, 逆に外世界の位置づけが困難になっている。タバナンの1820年ごろの人口は約180,000人とされ, この大きさが最高支配者 (pramoung king) を擁し, 中心そのものを形づくるに足るものであったという解釈もなりたつ。

上述の諸視点はいずれも, 東南アジアの国家像を捉えるためにきわめて有用であると同時に, それぞれ強調点の違いを含んでいる。大中心と小中心との相互関係を明確にすることは, 統合への一つの試みとなるであろう。

すべての単位が中心であるという考え方は, 客観的存在としての大中心の存在を論理的に困難にするおそれがある。この自己矛盾から脱するために, 世界認識において他の権威を認めることが, 外部権力の物理的強制力からは自由な小世界における統率者の中心性の獲得に寄与することを重視せねばならない。自らの世界の中で中心性を確保するために, より強力な中心が存在する限り, それに対するつながりの側面を保持するのである。

ここで再びヌグリスンビランに戻ろう。スンガイウジョンの慣習法に次のような章句がある。「すべての者はおのれの場所 (tempat-nya) において王 (raja) である。平民はおのれの場所において王である。首長 (penghulu) はおのれの場所において王である。役人はおのれの場所において王である。将はおのれの場所において王である。子供はおのれの場所において王である。女はおのれの場所において王である。……」。そして, 統一首長たる Yang Di Pertuan Besar の権限は小国の境界を越えたところにあるとされる。

国家の理念が統治者の支配力あるいは強制力の実効性を意味するならば, 小国家的状況における大中心の支配の実体は名義そのものの認知に過ぎず, 中心の空洞性をともなう場合さえあるのである。大中心が日々の生活, とくにその人的・物的な動員面に影響を及ぼすことが少ないという意味で, その非日常性を同時に指摘しておく必要がある。

上記の議論は, 国家ないし王権の観念の発生そのものを扱うものではなく, すでに成立した国家あるいは王権の精神的要素だけが伝播する際の一形態を国家周辺で観察したものである。東南アジア島嶼部においては, その人口希少性を背景に, 比較的近い過去に至るまで, この種の小国が, 新しい開拓空間に対して生み出されて面的な広がりを続けてきたといえる。この状況に対して, 植民地官

吏による名義の再解釈と再編成が加えられていくのである。

参 考 文 献

- Andaya, Barbara Watson. 1979. *Perak: The Abode of Grace*. Oxford University Press.
- Begbie, P. J. 1834. *The Malayan Peninsula*. Vepery Mission Press. (Reprinted in 1967 by Oxford University Press)
- Birch, E. W. 1906. The Election and Installation of Tungku Muhammad, C. M. G. Bin Tungku Anteh, as the Yang Di Per Tuan Besar, Negri Sembilan. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 46.
- Bland, R. N. 1895. Aturan Sungei Ujong. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 28.
- Braddell, T. 1856. Notes on Naning, with a Brief Notice of the Naning War. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Series II, 1.
- Caldecott, A. 1918. Jelebu Customary Songs and Sayings. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 78.
- Crawford, John. 1820. *History of the Indian Archipelago*. 3 Vols. (Reprinted in 1967 by Frank Cass & Co. Ltd.)
- Denison, N. 1886. The Kurau District, Perak. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 18.
- Geertz, Clifford. 1980. *Negara, the Theatre State in Nineteenth-Century Bali*. Princeton University Press.
- Gullick, J. M. 1958. *Indigenous Political Systems of Western Malaya*. The Athlone Press.
- Hervey, D. F. A. 1884. Rembau. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 13.
- Lister, Martin. 1887. The Negri Sembilan: Their Origin and Constitution. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 19.
- . 1890. Malay Law in Negri Sembilan. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 22.
- Maxwell, W. E. 1884. The Law and Customs of the Malays with Reference to Tenure of Land. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 13.
- Milner, A. C. 1982. *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*. The University of Arizona Press.
- Moor, J. H., ed. 1837. *Notices of the Indian Archipelago and Adjacent Countries*. (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co. Ltd.)
- Newbold, T. J. 1837a. Outline of Political Relations with the Native States on the Eastern and Western Coast, Malayan Peninsula. In *Notices of the Indian Archipelago and Adjacent Countries*, edited by J. H. Moor. (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co. Ltd.)
- . 1837b. Sketch of the Four Menengcabowé States in the Interior of the Malayan Peninsula. In *Notices of the Indian Archipelago and Adjacent Countries*, edited by J. H. Moor. (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co. Ltd.)
- . 1837c. Account of Sungie Ujong, One of the States in the Interior of Malacca. In *Notices of the Indian Archipelago and Adjacent Countries*, edited by J. H. Moor. (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co. Ltd.)
- . 1839. *Political and Statistical Account of the British Settlements in the Straits of Malacca*. 2 Vols. London: John Murray. (Reprinted in 1971 by Oxford University Press)
- O'Brien, H. A. 1884. Jelebu. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 14.
- Parr, C. W. C.; and Mackray, W. H. 1910. Rembau, One of the Nine States. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 56.
- Raffles, Stamford. 1879. The Maritime Code of the Malays, Part II. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 4.
- Shils, Edward. 1975. *Center and Periphery, Essays in Macrosociology*. The University of Chicago Press.
- Swettenham, Frank A. 1880. Some Account of the Independent Native States of the Malay Peninsula, Part 1. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 6.
- 坪内良博. 1979. 「南スマトラ、コムリン川流域およびムシ川下流部における集落形成史」『東南アジア研究』17(3).
- . 1983. 「東南アジアにおける人口と伝統的基礎社会の性格」『東南アジア研究』21(1).
- Wilkinson, R. J. 1921. Sungai Ujong. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 83.
- . 1971. (Original 1907–1916). *Papers on Malay Subjects*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Winstedt, Richard; and de Jong, P. E. de Josselin. 1954. A Digest of Customary Law from Sungai

- Ujong. *Journal of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society* 27(3).
- Wolters, O. W. 1982. *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*. Institute of Southeast Asian Studies.
- Zainal Abidin, Andi'. 1983. The Emergence of Early Kingdoms in South Sulawesi. *Tonan Ajia Kenkyu* [Southeast Asian Studies] 20(4).
- Zollinger, H. 1851. The Lampong Districts and Their Present Condition. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* 5.